

2005年2月27日 受難節第3主日礼拝

『聖霊の勝利』

(エレミヤ23章25～29、使徒言行録13章4～12)

「聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは...」、セレウキアから船に乗り、キプロス島に渡りました。そして「サラムスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせ」ました。こうして、パウロの第一回目の伝道旅行は始められました。バルナバとサウロは、聖霊によって選び出され、神の言葉を伝えるために教会から遣わされました。二人が自分で考え出したり、計画したことではありません。すべては神様からでたこと、神のご計画でした。神のご計画に従って訪れた先々で、二人は、大いなる神の業を目の当たりにすることになるのです。

さて、聖霊に導かれて町に着いた二人は、まずユダヤ人の会堂を訪ねました。そこでキリストの福音を宣べ伝えます。これは、かつて主イエス・キリストがなされたことです。福音書をみますと、イエス・キリストはユダヤの町々から始めてエルサレムで、人々を伝道されました。その後、サマリアに入り異邦人たちにも救いを宣べ伝えられましたが、主イエスは常に「失われたイスラエルの家から」伝道されました。救いと祝福は、アブラムとその子孫から、次いでイスラエルを通してすべての人々に及んでいく。それが神様の約束だからです。主イエスはいつも、この神の摂理の順番を忠実に守り通されました。それがキリストのなされた伝道でした。バルナバとサウロは、主イエスにならったのです。どの国、どの町に行っても、そこに暮らすユダヤ人たちをまず訪ねて、そこから神の言葉を告げ知らせていきました。

このことは、二人にとって大きな挑戦・チャレンジでもありました。というのは、エルサレムでキリスト教会への迫害が起こり、すでにその噂は地中海一帯に広がっていたからです。ローマ帝国の中に散らばって住んでいたユダヤ人たちは、エルサレムのニュースにはいつも敏感でした。ですから、行く先々の町で、ユダヤ人を相手にするということは、危険とリスクを伴っていたのです。迫害を逃れるようにしてここまでたどり着いた教会の人々。彼らにとって、ユダヤの会堂で伝道するというのは、火に油を注ぐことにもなりかねませんでした。しかし、そういう危険を承知の上で、バルナバとパウロは、まずユダヤ人たちを訪ねました。主イエス・キリストが歩まれた道を、二人はその通りにたどっていかうとしたのです。人間の知恵であれこれ考えるよりも、主イエスにならおう。そのことを第一にしたとき、結果として、第一回伝道旅行最初の実りがもたらされることになりま

す。その実りは、ローマ人の総督セルギウス・パウルスという人物でした。この人は物事を深く見ることできた、見識ある人物だったようです。町の訪れたバルナバとサウロを自ら招いて、二人が宣べ伝えている神の言葉を聞こうとしました。チャンス到来です。第一回目の伝道旅行を始めてまもなく、キリストのことをもっと聞きたいという人が出てきた

のです。バルナバもサウロも、きっと心が躍る気持ちで、総督を訪ねたことでしょう。ところがそこに、障害が立ちはだかります。バルイエスです。バルイエスというユダヤ人が、この総督に仕えていたのです。このバルイエスは、おそらくエルサレムでの噂を聞いて知っていたのでしょう。イエス・キリストが、神の名を汚した罪を着せられて、十字架で処刑された話を。その弟子たちが、キリストは復活したと唱えて、おおくの人々を惑わしている。だから気をつけよ。教会に反対する人々の、根も葉もない噂を、この男は信じていたのです。それで、総督のもとを訪れた二人こそ、キリストの仲間には違いない。そうならんで、二人の伝道の邪魔をし始めたのです。

聖書では、この男のことを、こう紹介しています。6節「ユダヤ人の魔術師で、バルイエスという一人の偽預言者」。魔術師というと、使徒言行録8章にもシモンという魔術師が出てきました。ペトロが聖霊を与えているのを見て、その力をお金で買おうとした男です。その罪をペトロに指摘され、悔い改めて主に立ち帰った人物として知られています。一方、今日出てきたバルイエスは、別名エリマとも呼ばれ、魔術師であると同時に「偽」預言者といわれています。つまり、空の星や天体の動きを見て、天気を占い、農作物の作付けの助言をしたり。旧約聖書やユダヤの教えに基づいて、政治や国をつかさどるのに必要なアドバイスをしたり。知恵ある者、先見者として、総督パウルスが頼りにしていた人、重用されていた人物と考えられます。その男が、バルナバとサウロの伝道を妨害したのです。「魔術師エリマは二人に対抗して、地方総督をこの信仰から遠ざけようとした」(8節)。

バルイエスの心にあったことは、容易に想像できます。もし総督がキリストを受け入れてしまったら、自分は失業するのです。国のあらゆることを決めるのに、総督は自分をいつもそばに置いて、自分に相談してすべて決めていた。それがキリストを信じるようになったら、自分の立場はバルナバやサウロに奪われてしまう。奴らは、総督に取り入ろうとしてやってきたのだ。そんな風に考えていたのでしょう。もちろんバルナバとサウロの二人は、そんなことは全く思っていない。ただ一人の人が、キリストを信じて永遠の救いにあずかってほしい。ただそれだけです。お礼をしてもらおうとか、バルイエスの代わりに取り立ててもらおうとか、全く念頭にありません。でもバルイエスは、これまで占めていた自分の立場を守るために、ただそれだけのために、必死になって、パウロ達を妨害します。それが、一人の魂の救いを妨げることになろうとは思ってもよらずに。さらに自分自身の魂まで危険にさらすことになるとは気づかずに、総督がキリストの下に行くのをやめさせようとしたのです。彼がしたことは、その名前が物語っています。バルイエス、つまりイエスの息子という意味です。しかし彼がしたことは、まさしく偽預言者、偽イエスです。本物の預言者ならば、人々を神様の下に正しく導いていくべきなのに。主イエスの息子ならば、人々が救い主をしたっていくのを喜ぶべきなのに。皮肉なことに、「イエスの息子、偽預言者のエリマ」は、その名の通り、罪を犯すばかりです。

けれども、神の御業は、どんな激しい抵抗にあっても前進します。この世で力ある、どんなに心ない者たちの妨害も、神の御業を止めることはできません。「パウロとも呼ばれて

いたパウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、言った。『ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか』(9～10節)。最後のところは、ギリシア語原文ではこうなっています。「悪魔の子よ、あなたはあらゆる義を憎み、お前は、主のまっすぐな道・真実な道を、曲げてこなかったか？」

主が備えた救いの道、信仰の道、永遠の命への道は、決して誰も曲げることはできません。ゆがめることすらできません。もし曲げようとするれば、けがをするのはわたしたちの方です。「とげのついた棒をけると、ひどい目に遭う」のです(使徒 26 章 14)。このことをパウロ自身、身をもって経験してきました。今でこそキリストを、忠実に宣べ伝えているパウロ。そのパウロも少し前までは、バルイエスと何ら変わることはない人だったのです。パウロもまた、キリストと出会うまでは、キリストを誤解し、教会を迫害し、伝道の妨害をしてきた人でした。そのためパウロも、一度は目が見えなくなります。見るべきものがまだ見えていなかった、そのことを思い知らされます。そのパウロの目が開かれるときがきます。それは、本当のイエスに出逢った瞬間でした。わたしが迫害してきたイエス・キリストは、わたしを救うために自ら進んで十字架につき、その死によってわたしの罪を償ってくださった御方だ。しかも死からよみがえって、わたしの前に現れ、わたしの罪を赦し、信仰へと招いていてくださる。それこそが、真実のイエス・キリストだ。このキリストに真実に出逢ったとき、本当のキリストを受け入れたとき、パウロは目が開かれました。目からうろこが落ちました。本当に見るべき方、主なる神だけを見つめ、主が開いてくださった救いの道をまっすぐ歩んでいこうと決意しました。イエス・キリストが共にいて、わたしたちの手を引いて、信仰の道へと導いておられるからです。

そのパウロが、バルイエスに裁きの言葉を伝えます。「お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。今こそ、主の御手はお前の上を下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう」(11節)。するとバルイエスの目は、言葉通り見えなくなり、手引きをしてくれる人を捜し回る有り様でした。しかし、バルイエスの目が見えなくなったのは、「時が来るまで」です。永久にではないのです。パウロもそうだったように、もし今からでもキリストを信じて罪を悔い改めるなら、遅くはない。バルイエスの目は、主イエス・キリストの手によって、再び開かれるのです。その時を待ち望みながら、かつての自分自身をみつめる思いで、パウロは主の言葉をバルイエスにも語りました。今からでも遅くはない、悔い改めて、キリストを信じて洗礼を受けるなら、あなたの罪は赦されるのだ。悔い改めと救いに招く神の言葉を、バルナバとパウロは、あの偽預言者にもきちんと伝えていったのです。心を込めて。

さて、この出来事を見て、地方総督セルギウス・パウルスはついに、キリストを信じます。聖書に忠実にいえば、バルナバとパウロの二人が語った「主イエス・キリストの教えに非常に驚いて、信仰に入った」のです。ここでも、地方総督の心を最終的に動かした

のは、主の御言葉でした。これが聖霊の勝利です。聖霊の勝利、それはとりもなおさずみ言葉の勝利でした。聖霊に導かれて語られた、神の言葉がどれほど大きな力を持つか。そのことを確信させられます。

このようにして、第一回伝道旅行最初の実りが与えられました。この実りは、既にみてきたように、何の障害もなくもたらされたものではありません。はげしい妨害の中で、与えられたものです。しかし、わたしたち人間のどんな悪意や妨害も、神の御手を妨げることとはできませんでした。障害や試練がどれほどあろうとも、その中で、神の力は生きて働きます。神の働きは、いつどのようなときにも、わたしたちの内に生きて働く現実の力なのです。このことを信じましょう。そして、バルナバとサウロがしたように、どのような人びとに対しても、心を尽くして、本当のキリストを指し示し続けましょう。わたしたちが本物のキリストを証ししていくなら、そこに神の力・聖霊は働きます。み言葉の実りは確実に与えられていきます。聖書が証言しているとおりに、神の言葉は、エルサレムからはじまってユダヤ全土に、さらに世界中へと、ますます栄え広がっていくのです。

[説教者：堀地正弘牧師]